
最強のNPC共（仮）

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強のNPC共（仮）

【Nコード】

N6833Y

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

どうも、勇者だ世界を何度も転生しながら魔王を倒しながら生きてきた。

ところで女神様、この状況は何なんだ。

何で転生した場所が『三千年後』、俺は赤ん坊で。

そしてそして、何で俺の妹が魔王なんだーーーーー。

この腐れ女神がーーーーー。

といった感じで勇者と魔王の兄弟が世界を救ったりしたりしなかつ

たりするお話です。

勇者と魔王（前書き）

一話一話短めにのんびり更新。

勇者と魔王

「くははははは、そのていどかのう、勇者よ」

何枚も張り巡らされた結界魔法の中心でいかにも魔王、といった姿をした化け物が妙に高い声で高笑いをつづけていた、勇者と呼ばれた少年はポロポロの体でありながら、瀕死状態のなかまをかばうように魔王の前に立ちふさがっている、

「なんじゃ、すでに返事をする気力まで失ってしまったようじゃのう」

「う、うるさい、魔王」

なんとか、声を絞り出したがそれが最後の力であったようで、勇者はそのまま地面に倒れ伏した、

「くそ、ここまでか、だが、覚えておけ魔王、僕が倒れても第二、第三の勇者が…」

「勇者よ、それは、魔王のセリフじゃ」

「……………」

呆れたように言う魔王に対して、勇者は少し迷ってから言葉を続ける、

「たとえば、この身、何度たおれようと、我が命、我が魂が朽ち果

てるまで神々の力で何度でも蘇り貴様の前に立ちふさがるだろう」

「それで、高笑いしたら、完全に魔王じゃな…、しかも、戦い方が蘇生頼みとは、魔王どころか、それ、もうゾンビじゃろ…」

「……………」

勇者視点

くそ、何なんだこの魔王ってやつは、エンカウントしたと思ったら、速攻で僧侶（女）と、魔法使い（女）と戦士（女）をムチャクチャチートくさい、魔法で葬りさつたくせに、僕に対しては、ねちねちと死ねない程度のダメージでいたぶってくる…

とっ、思えば面白そうに僕のセリフに対していちいち、ツッコミを入れてくるし、よくわからん？

だかな、魔王お前の遊びのおかげで最後の一撃を撃つための時間稼ぎはできた。

いくぞーか八かの

「我放つ聖光の一撃」 《セイクリッド・ブラスト》

魔王視点

ふふふ、ほんとに飽きさせない奴じゃ、女三人連れて現れたときは、生き返ることが、できぬくらいまでバラバラにしてやるうと思いましたが、ていうかどうということじゃ連れている仲間がまえと違うとか、これなら、まえの戦士（男）三人連れた何がしたいのかよくわからんパーティーの方が遙かに増しじゃ…

て、そんな、話じゃなくてのー、ん、勇者が何かやるうとしてののー、どれ、少し反撃してやるかの…

「我穿つ漆黒の三つ又魔槍」（ブラッド・ジャベリン）

…

勇者の身体を何十本の魔槍が貫く、それでも、勇者は口元に笑みをうかべていた。

「魔王、油断したな…」

魔王の身体を一条の光が貫き通していた、闇雲に放ったはずの一撃は、魔王の結界ともに、奇しくも魔王の核を撃ち抜いていた、

「クツクツクツ、久しぶりだよ勇者、何千年ぶりかのう、これが死ぬ感覚というやつだったかのう」

どこかうれしそうに声色を発しながら、徐々に魔王の身体が虚空に消えて行く、

勇者も限界なのか、色の無い瞳で虚空をにらむ、

「さようならだ、魔王、二度と出会わない事を願っているよ」

「つれないのう、お主が居なければこんな世界、詰まらぬではないか…」

「僕は、もうごめんだ…終わることの無い、この不毛な戦いも…お前のその見慣れた面を拝むのも…」

「見慣れた面…、おお、そうか、そうじゃのう、長き、遊びに付き合ってもらった礼もあるしのう」

何か納得したように、魔王がうなずくと、それっ、っと一声発してその頭にかぶっていたらし化け物の顔の仮面をはずす、その下には、

「なっ、お…おんな！」

「またのう勇者、輪廻の果てで合おうぞ、いつまでも続く終わり無き時の果てでのう…」

そう、一声かけると魔王は、ゆっくりと虚空にきえさった。勇者の驚いた顔がさぞ可笑しかったのか、その口元に微笑を浮かべながら

勇者と魔王（後書き）

今回は、書き溜めていたので投下します。
転生物のぞくに言う一章ですね。

転生者 勇者（前書き）

二話目です。

転生者 勇者

薄っすらとしていた光が瞬きを繰り返すことに、段々ハッキリしてくる。

またか、何度転生を繰り返しても、あの腐れ女神と顔をあわせるのだけは、憂鬱だ。

「お帰りなさい、今宵の旅はいかがでしたか、『導き手』殿」

目の前には、BL小説を片手に、女神様が紅茶を飲んでいた。

「ただいま戻りました、女神様。今回は、魔王を倒せたものの、私も命を失ってしまいました」

何時もの事なので、特に気にせず返事を返す、

「そう、お疲れ様。それで『導き手』殿、次はどこに行きたいですか？」

手元から少しも目線を話す様子が無いまま、少し頬を染めている女神様が聞いてくる。

「どこでもかまいません、女神様の御心のままに。と、言いたいところですが。一つだけお願いが、魔王のいないところでお願いします」

正直行く場所はどこでもよかった、とりあえずこの腐れ女神様とあの魔王から離れられるなら・・・

「魔王、ああ、『秩序』^{魔王}のことですか。つまり、魔王である彼女がいなければどこでも良いと、言うことですね」

B L小説を凝視したまま、返事をする女神様、てか、このお方さつきから一度も瞬きしていない、魔物よりよっぽど怖かった。

「ええ、どこでもかまいません」

ちなみに、今まで繰り返してきた転生の中で、魔王の性別を知ったのは始めてだ。

というか、なんども会っているのに、魔王に性別があると知ったこと事態が初めてだ。

いつもいつも、化け物の皮なのか、幻影魔法の一種なのかよくわからないが、典型的な『魔王』然とした格好をしていたため気にしたことすらなかったのだ。

そんな感じで、少しそれてしまつて気がする思考を悶々と続けていた所に、ありえない言葉が降ってきた。

「では、さつきまでいた時間軸から三千年後に転生してください」

では、とは何だろう、確かにどこでも良いと言いはしたが、三千年後だと。

脈絡が無さ過ぎる、てか、一回くらいその手元のB L小説から目を上げるよ、この腐れ女神様が泣くぞこのやろつ。

と、戸惑う思考を押さえつけて、とりあえず疑問をぶつけてみることにする。

「三千年後ですか、せめて、その理由だけでも教えていただきたいのですが、この腐れ・・・」

おっと、考えていたことがそのまま口から出そうになった。

「理由ですか、転生の時間を決めるのは、私ではなく『時代』なのですよ、私は『導き手』を必要としている『時代』に、あなたを送っているに過ぎませんから」

腐れ女神様は、まったく顔を上げずに理不尽な言葉を、吐き続ける。

「わかりました、ではそれで納得することにして、三千年後に行つてまいります」

まあ、このくさつたお方と問答をしてもしかたがないので、内心の動揺をのみ消して指示に従うことにする。ていうか、この人（人ではない？）は、一度言った言葉をけして曲げないので、反論する意味がまったく無いのだ。

そんな感じの会話を終えて、体をリラックスさせると、ゆっくりと目を閉じていく。

転生のための準備だ、感覚としては、睡眠が一番近いかもしれない。

「では、おやすみなさい『導き手』殿、最後の旅に光の加護があらんことを」

薄れいく意識の中で見えたのは、手元から少しだけ視線をはずした女神様だった。

その表情が、少しだけさびしそうに見えたのは、僕の気のせいかもしれないが……。

転生者 勇者（後書き）

感想などありましたらよければ。

転生者 魔王（前書き）

三話目です。

転生者 魔王

わたしが、転生の間に入っていくと、女神様がその手で優しく光り輝く球状の者を抱きしめていた。

「なんで、そこまで大好きなのに、いつも本で顔隠して気の無い不利をするのかねえ、あんたは」

「な、ナンノコトデスカ、知りませんよ」

私は腐った林檎なんですから、とか意味のわからんことをのたまってらっしゃる方の頭を、ひっぱたいて、とりあえず意識を戻すかね。

「おい、帰ってきんしゃい、この腐れ女神」

「ぶはっ、って腐っても女の子ですよ、顔面はやめてください、顔面は」

腐ってもって、勇者の前ではかっこつけるくせに私のまでとことん繕おうとしないなこのお方は。

「これが、恋ってやつかねえ、甘酸っぱいねい」

「ぶっはー、っここ、鯉、淡水魚には興味ありませんからー」

「ー」
なんかあせった女神様が、紅茶噴出しながらおろおろしていらっしやる、おお、おもしろい。

て言うのは、置いていてこっからは少々まともな話だね。

「で、女神様、実際問題私たちが『三千年後』に転生するって言うのはなぜなんさね、それにさっきの最後の旅って言うのも気になるさね」

私が、会話を変えたことでようやく落ち着きを取り戻した女神様（腐）、

「て、（腐）てなんですかーーーーー」

「なにに、叫んでんのや」

「うっ、世界の不条理にです」

と、腐った小説に顔うずめながら泣きまねしちよるけど、口がにやついてるって、女神様（腐）、

「あなたもですかーーーーー、いえもういいです、これ以上くと話が進みません」

それで、なぜ『三千年後』かって話ですな」

「そやそや」

「実は、私の力では直接『三千年後』に干渉できないですよ、多分人間たちが何か世界に干渉したんだと思うんですけど」

だから、実際に送るのは、十五年くらい前になると思います」

なるほど、『三千年後』に何かある可能性があるから、それを調べてほしいと、で、実際送られるのはその十五年ほどまえっちゅー」

とやな、まあ十五年で準備しろってことかいな、なかなか厳しいこと言ってくれるのな。

「十五年か、なかなか、厳しいこと言ってくれるのなあ」

「まあ、初心に戻ったつもりで、楽しんでくるといいですよ」

初心？ちゆうことは、

「なんや、こちら、今までの成長全部パーなんか」

「ええ、まあ、そういうことです、『三千年後』に飛ばすって言うのはそれだけリスクの高いことなんですよ」

「マジかい、それじゃうちだけ二百年待ったりしなくちゃいけないんじゃない」

「それは、大丈夫です『導き手』と『秩序』は対の存在ですから、ちゃんと同じ時空に落ちるようになりますよ」

その言葉にちよっとほっとするわー、正直勇者たんが二百年も着てくれないとかなきそうになるところだったよー、

「それじゃ、最後の話ですね」

いつにも無く、まじめな顔の女神様（腐）、

「もう、いいです」

「何いきなり、いじけてんのや」

胸に抱きしめた勇者の魂にのの字をかくなや、

気をとりなおして、

「それじゃあ、最後の話ですね」

「なんや、さつきから最後最後って、なんかもう二度と会えない見たいやんか」

「ええ、そのまさかですよ」

「な、」

「今までの、数え切れないほどの転生、それに今回の『三千年後』もの月日を越える転生、はっきり言って、お二人の魂はもうこれ以上、転生という輪廻に耐えられる状態ではないのですよ」

な、かなり驚きの報告やね、そうか

「じゃあ、これでお別れなんか」

「ええ、そういうことになりますね」

だから、さつきも勇者の魂抱きしめてないっておったんやな、私らは存在を付加されて、この世界の守り手として女神様に作られたんやから、子供みたいなものもんな、

「ふん、湿っぽい話はなしや、ほなうちもいくわ」

「魔王たん、言葉使いがめっちゃくちゃですよ」

「む、わかってるわ」

「ティツシユは持ちましたか、ハンカチは、さびしくない？大丈夫？」

「ああ、もう遠足前のお母さんかって、大じよぶやから、安心して見送らんかい」

そう言っつて転生陣の上に立つ、ほな、いこか。

うるうる、瞳に涙を溜めている女神様は見ない見ない。

「それじゃあ、いってくるよ」

「うん、がんばってください」

「いままで、ありがとうな……、お母さん」

キユーン、光に包まれながら静かに魂に還っていく。

さようなら、おかあさん。

しばらく経って、転生の間には、なきながら二人分の魂を抱きしめている女神様がいた。

「さようなら、クレア、サクラ」

きつと、いえ今回こそは、二人とも幸せになるのよ」

やさしく抱きしめた、二人の魂が静かに世界に還っていく。

そこにあるのは、今まで以上の困難だろう、それでも二人には幸せになってほしかった。

たった二人の可愛い子供たちに。

転生者 魔王（後書き）

次でとりあえず今回の投下分はおしまいです。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」b y女神様（腐）（前書き）

とりあえず転生編最後です。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」by女神様(腐)

そこにあるのは静謐な闇にして、暖かい空間。

俺の意識が戻ったのは一寸前だった。

きつとここは俺の母親に当たる人の、お腹の中なのだろう。

そこまで、理解してしまさながら子供に戻ってしまったのかと心底後悔する。

だって、あれだぞ、なんていえばいいんだ、ここ最近はある程度年をとった状態で転生してたからな。

気恥ずかしいというか、魂の年齢的には何千歳経っているかわからない俺だぞ。

と、そこまで考えて、この母体という空間にもう一人、先客がいることを思い出した。

と、言ってもおれは今意識が戻ったという話でずっと一緒にいたのだろうか。

そうだな、この子は、男の子だろうか、女の子だろうか。

きつと俺は遠くない未来に旅に出ることになるだろうが、それまでこの子を大切にしようとなんとなくそう思った。

ん、世界が明るくなった、もしかしたら生まれるのかもしれない。

「おぎゃーーーーー」

そう思っていたら、自分の口から酸素を求める産声があがった、

あぶねー、正直呼吸できなくて死ぬかと思った。

まあ、俺のことはいい、俺のあとに妹も無事生まれてきたみたいだ。

女の子だ、妹だ、ワッショイ。

そして、妹が産声を上げながら静かに目を開ける、いやーやっぱり俺の妹可愛いな。

そして俺と妹の目が合った瞬間俺は理解した。

確かに意思が宿る、その瞳。

何度も顔を合わせたか、実際に顔見たのは一度だけ。

それでもわかる理解できてしまう。

俺の妹は、魔王だ……………。

- よろしくお願いします、お兄様。

双子だからなのか、なぜか伝わってきたその言葉

それを聞きながら俺は意識を失った。

「あら、可愛い赤ちゃんですね」by女神様(腐)(後書き)

正直何歳からはじめるか悩んでいます。がぼちぼちがんばります。

誤字脱字感想など書き込んでくれると嬉しいです。

最強の妹と最狂の母上（前書き）

悩んだ末、とりあえず三歳から

理由は、自分も物心がついたのでこのくらいだったかなー
とかそんな単純な理由です

髪の部分に黒のメッシュが入っており、目は蒼の瞳と金の瞳のオッドアイになっているし、サクラは綺麗な黒髪で前髪に金のメッシュ、俺とは左右対称のオッドアイをもっている。

正直に言おう、黒髪のオッドアイ、しかも金のメッシュを丁寧に三つ編みに結び上げた今、目の前で小首をかしげている少女は、正直めちやくちや可愛かった。

仮面をつけていた魔王時代ならともかく、俺はこの凶悪な可愛さを持つ妹魔王に二度と勝てないという自身がある。

しかも三歳だぞこの美貌でゴスロリドル見たいな格好して、小首を傾げてみる。

お兄ちゃん、悶絶死するわ。

念話でしか、意思疎通ができなかったころこそがんばったが、もう無理です。

お兄ちゃん、この子がいないと生きていけません。

は、今の笑顔はそこまで考えてのことかなんと言っ策士、お兄ちゃん子のこの将来が心配です。

「どうしたの、クレアお兄ちゃん」

「サクラ」

「はい」

「お母様の、足音がする」

ドバーーン、毎度毎度、家が壊れるんじゃないか、というレベルの音を立てて、母親が外に飛び出してきた。

「クレアーーーーー、サクラーーーー、お母さんを置いてどこにいつてしまったのーーーー、」

そして、絶叫、ここが閑静な森の中にある自宅じゃなければ、近所から苦情がきそつなほどのおんりょうである。

「おかあさん、ここにいますです」

クスッと、クレアが人懐っこい笑みを浮かべると、俺意外と話すときの年相応の口調になる。

「クレアーーーーー、サクラーーーー」

母、マリアが、騎士もびつくりのスピードで俺たちの前まで来ると、ひしと俺とサクラを抱きしめて、オンオンなき始めた、こうなるとまだ年相応の体しかもたない俺とサクラには振りほどくこともできず、されるがままになるしかない。

「ははうえさま、なきやんでください、お、ぼくとサクラは、ははうえさまがねているあいだに、おはなのかんむりをつくって、おどろかせようとしただけなんです」

「クレア、サクラ」

もしもの、ために考えておいた言い訳を俺たちを抱きしめて泣きじやくっている母親に打ち明ける、母も嬉しそうに泣き顔を笑みの形に変えながら。

「おきて、二人がいないことのほうが驚いたわ、この馬鹿息子」

罵倒してきた、ええー、今罵倒されるシーンだっけ。
ほめられるとか、そんな感動的な展開は無しですか母上。
実際のところ妹と普通の言葉遣いで話すために、人気の無いところ
に出てきただけだったので、つかまって家に帰るのに反対はしない
のだが、この後、一応作っておいた花の冠を頭につけた母親に小脇
に抱えられ家路につく俺たちであった。

「サクラ」

「はい、おかあさん」

「ちなみに、この冠の作り方は誰に教えてもらったの？」

「ドロシーですよ、おかあさま」

正直に、俺達の家のメイドさんの名前を明かすサクラ、

「そう、じゃあドロシーにきつくお説教しとかないとね」

「へ、なぜですかははうえさま」

「あたりまえでしょ、花の冠のせいで可愛いクレアとサクラが家出
したのよ！ー！ー！ー」

「ー家出じゃねーよ！」

心の中で同時にツッコんだ俺達を小脇に抱え、今日も優雅独尊な母
が行く。

いや、普段はかなりの淑女なんですよ。

俺とサクラのこととなるとキャラ変わるだけで。

そんな、誰に弁明しているのかわからない、俺達を抱えて母は家路に着いたのだった。

ちなみに、予断だ、両手がふさがった母上が扉を蹴破ったのは。

母上、俺とサクラのこととなるとキャラ崩壊するのは、勘弁してくれ。

最強の妹と最狂の母上（後書き）

とりあえず、ぼちぼちとやっていきます。

誤字脱字感想などありましたら書き込んで下さると嬉しいです。

更新としましては、基本毎日、祝日、休日などはアクア、とグラビを書いてるので更新しない場合もありますが、基本平日は短いですが一話ずつ落としていきたいと思えます、このペースでいつまでいけるかは不明ですが、お付き合いいただければなと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6833y/>

最強のNPC共（仮）

2011年11月21日03時54分発行